

# 池田光政筆「古筆臨模聚成」所収の『源氏物語』本文の古筆切

中葉芳子

はじめに

池田光政筆「古筆臨模聚成」に関しては、すでに四辻秀紀「伝藤原公任筆『大色紙』の構成について―池田光政筆『古筆臨模聚成』の紹介をかねて―」<sup>(1)</sup>や北井佑実子「池田光政筆『古筆臨模聚成』における『貫之集』古筆切三種」<sup>(2)</sup>に詳しい。ただ、データの記載ミスなどが見受けられるため、その点を正した上で全体の構成を確認しておく。

「古筆臨模聚成」は、林原美術館で「書跡4881」<sup>(3)</sup>として、一巻ずつ整理番号が付されている。その順は、北井氏が記されたように、

4881 菅原道真から源実朝まで四十五名

4882 後鳥羽院から後水尾院まで二十四名

4883 九条兼実から津守国冬まで三十七名

4884 近衛家基から覚明まで八十八名

となる。それに対して四辻氏は、林原美術館の整理番号は本来の順序ではないと考えられたようで、『古筆名葉集』に倣い、

第一巻 後鳥羽院から法皇（後水尾）まで歴代天皇二十四名

第二巻 九条兼実から津守国冬まで摂家・精華・能書家・歌道家など三十七名

第三巻 近衛家基から賞明まで法親王・公家・武家・連歌師など八十八名

第四巻 菅原道真から源実朝まで四十五名と並べ替えておられる。

先に北井氏が報告されたように、外題等巻順を示すものは残

されていないため、光政の意図は判然としない。ただ、古筆切を臨模して聚成した光政に『古筆名葉集』に関する知識がないとは考えにくい。よって、光政が意図した巻順は、四辻氏が示された順序であろう。

なお、四辻氏の巻順と林原美術館の整理番号との対応は、

第一卷 書跡 488-2

第二卷 書跡 488-3

第三卷 書跡 488-4

第四卷 書跡 488-1

となる。

#### 一 臨模された『源氏物語』関連の古筆切

「古筆臨模聚成」には『源氏物語』本文やその享受資料を書写内容とする古筆切の臨模が含まれている。

第一卷 書跡 488-2

後二条院 橋姫巻

第二卷 書跡 488-3

世尊寺行能 総角巻（三葉）、源氏系図（四葉）

第三卷 書跡 488-4

花山院師賢 松尾切（源氏集）

吉田兼好 須磨巻

姉小路基綱 源氏系図

岩山道堅 若菜下巻

第四卷 書跡 488-1

顕昭 建仁寺切（源氏積）

合計十三葉が臨模されている。「古筆臨模聚成」全体からすれば二割にも満たないが、現時点で元の断簡が報告されておらず、「古筆臨模聚成」によってのみ存在が知られる新資料が多く含まれている。

前掲の北井氏の論に「『古筆臨模聚成』は、書写が忠実でない部分があるので注意が必要となろう」とあるように、光政はすべてを忠実に臨模しているわけではない。縦の大きさは臨模した卷子本の高さという制限があるので一行の字数が元の断簡とは異なり、それに伴って一面の行数も元の古筆切とは異なってくる。また、臨模とは言っても、元の断簡の筆跡の特徴をつかんでいるとは必ずしも言えないものもある。

ただ、「現在では散逸しているが、『古筆臨模聚成』によってのみ、その存在を確認することが出来る貴重な資料である」（北井氏前掲論文）ことも「その資料的価値は極めて高い」（北井

氏前掲論文) こともまた事実であろう。

以下、本稿では、『源氏物語』本文を臨模した古筆切六葉を紹介する。

## 二 伝後二条天皇筆橋姫巻

まず、「古筆臨模聚成」所収断簡の翻刻を示す。

たちをくなつれくなるあそひかたきになと

うちおほしけり中将のきみ中くみこの

思ひすましたまへらん御こ、ろはへをたいめん

してみたてまつらはやとおもふこ、ろそふかく

なりぬるさてあさりの帰りいるにもかならず

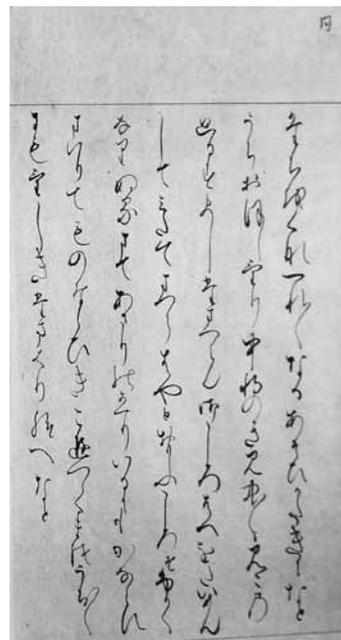
まいりてものならひきこゆつくまつうちく

にもけしきたまはり給へなと

〔源氏物語大成〕<sup>(1)</sup>一五一六頁①⑤

橋姫巻、阿闍梨が語る八宮の生活を聞いた薫は、阿闍梨に八宮への取次ぎを頼む場面である。

誤写と考えられる、一行目「たちをくな」(諸本は「たちをかな」、六行目「きこゆつく」(諸本は「きこゆへく」)を除けば、定家本系統の本文を持つ。例えば、二行目「中将のきみ」



は、定家本とは一致するが、河内本や多くの別本は「中将の君は」とする。

光政が臨模した元の古筆切は管見に入っていない。伝称筆者を後二条天皇と伝える橋姫巻の古筆切も、小林強「源氏物語関係古筆切資料集成稿」<sup>(5)</sup>によると、ツレと目される断簡は一葉のみである。

しかし、実践女子大学には二条天皇を伝称筆者とする橋姫巻の断簡が一葉所蔵されている。その断簡は、六半切で一面十行詰、定家本系統の本文を持つという。実践女子大学所蔵の断簡は現時点で公開されていないため詳細を述べることは控えるが、伝称筆者と巻を同じくすること、「古筆臨模聚成」を实践

女子大学所蔵切と同様の形態（六半切、一面十行詰）だと考えた場合に文字数がふさわしいこと、本文系統が一致することなどから、ツレとみなしてよいであろう。

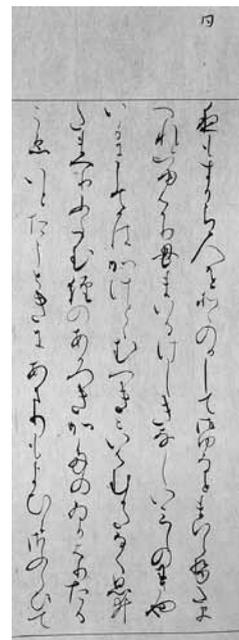
伝称筆者の後二条天皇（一二八五～一三〇八）は鎌倉時代後期の人物であり、その時代相応の断簡であると考えれば、鎌倉時代後期書写と考えられる。鎌倉後期書写で定家本の本文を持つ当該断簡の資料的価値は高い、と言える。

### 三 伝世尊寺行能筆総角卷

世尊寺行能を伝称筆者とする総角卷の断簡は三葉が「古筆臨模聚成」に臨模されている。臨模されている順ではなく、『源氏物語』本文の順に翻刻を掲げる。

夜もすから人をそ、のかして御ゆなとまいらせたま  
へれとつゆはかりもまいるけしきなしみしりのわさや  
いかにしてかはかけと、むへきといはむかたなく思ひ  
たまへりふたむ経のあかつきかたのゐかはりたる  
こゑいとたうときにあさりもよひにさふらひて

〔『源氏物語大成』一六五五頁⑤～⑧〕



総角卷、重体の大君を薫が献身的に看病する場面である。

一～二行目「たまへれ」は、定家本・河内本、多くの別本は「たてまつり給へ」、別本の横山本・平瀬本は「給へ」で、ここは臨模の独自異文。二行目「けしき」は別本の横山本・平瀬本と一致し、他の諸本は「けしきも」とする。五行目「こゑ」は河内本系統の大島本、別本の平瀬本と一致し、他の諸本は「こゑの」とする。このように、臨模は別本の本文と考えられる。残り二葉は内容が連続するので続けて掲げる。

我も仏を念したてまつりたまふ事

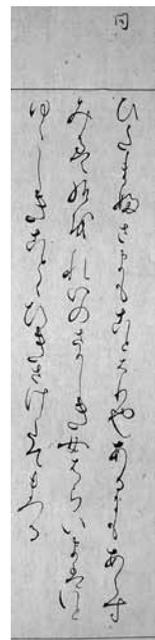
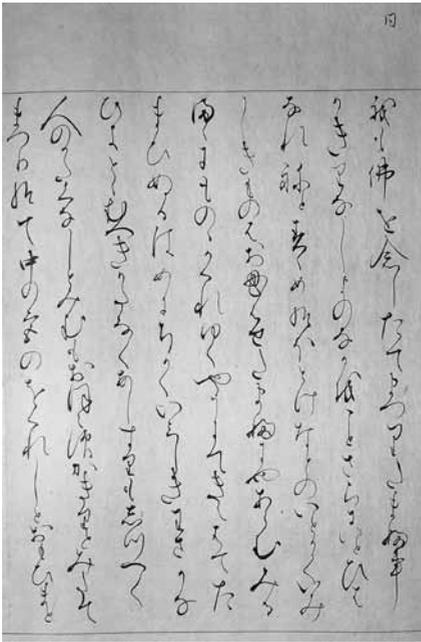
かきりなしよのなかをことさらにいとひは  
なれねとす、め給ほとけなどのいとかくいみ  
しきものはおもはせたまふにやあらむみる  
ま、にもの、かくれゆくやうにてきえはてた  
まひぬるはめにちかくいみしきわさかな

ひきと、むへきかたなくあしすりもしつへく  
人のかたくなしとみむもおほえすかきりとみたて  
まつり給て中の宮のをくれしとおもひまと

〔源氏物語大成〕一六六一頁⑥～⑩

ひたまふさまもことはり也あるにもあらず  
みえ給をれいのさかしき女はらいまはいと  
ゆ、しきこと、ひきさけたてまつる

〔源氏物語大成〕一六六一頁⑩～⑫



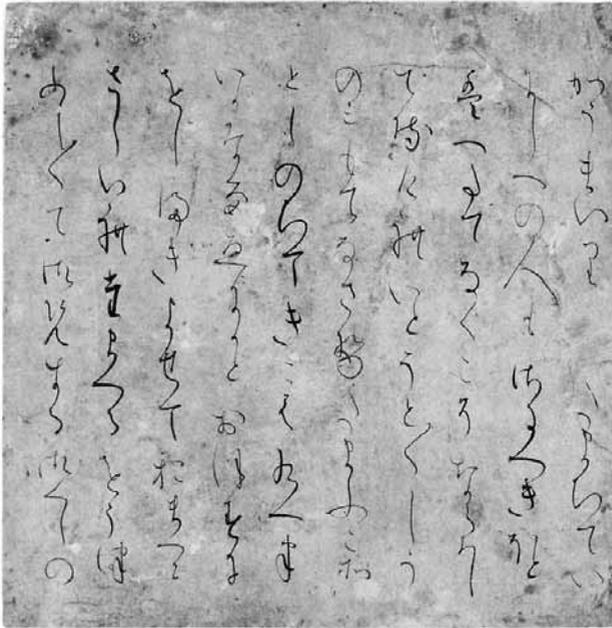
同じく絵角卷、薫が見守る中、大君が亡くなる場面。妹の中君も取り乱している。

本文を確認すると、一枚目一行目「念したてまつり」は別本の保坂本・平瀬本に一致し、定家本・河内本は「ねんせさせ」とする。一枚目五行目「もの、かくれゆく」は河内本、別本の横山本に一致し、定家本は「ものかくれ行」もしくは「物、かくれゆく」とする。一枚目六行目「めにちかく」は別本の横山本・平瀬本に一致し、定家本・河内本は「ナシ」。一枚目八行目「みむも」は、定家本・河内本「みむことも」で、臨模の独自異文。一枚目九行目「をくれしと」から二枚目最後「ひきさけたてまつる」は、ここまでの異同で近い本文を持っていた横山本・平瀬本が「ふしまろひなき給を人／＼ひきさけたてまつるをくれしと思ひいり物し給をかきりなればゆ、しきこと、さかしかる女房あり〔思いり〕は平瀬本「思ひとりて」と大きく臨模と異なる。

これら三葉の本文を確認すると、定家本・河内本とは異なり、

別本の中にも特に近い本文を持つ伝本は見当たらないことがわかる。別本の本文を持つ断簡の臨模と考えられる。

三葉とも臨模した元の古筆切は管見に入っていない。しかし、世尊寺行能を伝称筆者とする総角巻の断簡は数多く伝存してお



り、『古筆学大成』にも伝世尊寺行能筆源氏物語切(一)として所収されている。臨模した断簡は、これらのツレであろう。ただ、この伝世尊寺行能筆源氏物語切(一)は筆跡に特徴がある。『平成新修古筆資料集』<sup>5)</sup>に所収された断簡を参考として上に掲げておいた。

臨模と元の断簡のツレと思われる断簡とを比べてみると、臨模には元の断簡のツレほどの特徴が見られない。ツレと断定するには気になる点ではある。

世尊寺行能(一一七九〜一二五二)を伝称筆者とする総角巻の断簡は、ツレに手習巻も含まれる。これら一連の断簡は、六半切で一面十行詰、本文は別本とされる。行能よりやや遅れる、鎌倉時代中期の書写と考えられている。

これら伝世尊寺行能筆総角・手習巻の断簡は、二巻にわたるとは言え、『古筆臨模聚成』の三葉を加えれば二十葉を超える断簡が集成されている。現在も時折目録などに掲載されており、今後とも新出断簡が期待できる。独自異文を持つ別本であり、本文研究の一資料としても興味深い断簡であるため、臨模とは言え三葉もの新出断簡が得られたことは意義があろう。

#### 四 伝吉田兼好筆須磨卷

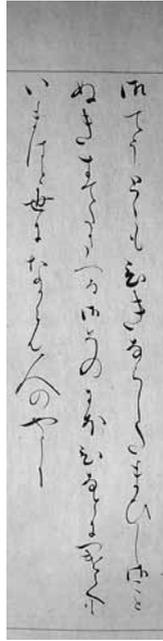
「古筆臨模聚成」所収断簡の翻刻は以下の通りである。

御てうと、もひきならしたまひし御こと

ぬきすてたまへる御そのにほひなとにつけても

いまはと世になからん人のやうに

〔源氏物語大成〕四一五頁⑩～⑪



須磨卷、須磨へ退去した源氏から送られた手紙を見て、紫の上が嘆く場面である。

本文は、一行目「御てうと、もひきならしたまひし」は定家本と一致し、河内本は「御てうとひきならし給へる」である。臨模自体が短いので断定はし難いが、定家本系統であろう。

「源氏物語関係古筆切資料集成稿」によると、村上列氏蔵手鑑まさこの鶴所収切が元の古筆切のようである(記載された『源氏物語大成』の頁行数による)。図版などは確認できていない。ツレとして、『古筆学大成』所収切などがある。

吉田兼好を伝称筆者とする須磨卷の断簡は、六半切で一面十行詰、本文は定家本系統とされる。書写年代は鎌倉時代後期と見られている。

#### 五 伝岩山道堅筆若菜下卷

「古筆臨模聚成」には「道堅／岩山佐々木／末云」とある。

本文部分の翻刻は、

又こよなくまさりにたるをとせめて我かしこに

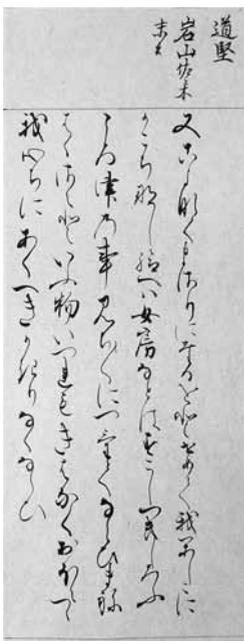
かこちなし給へは女房などはすこしつきしろふ

よろつの事みちくにつけてならひまね

は、さえといふ物いづれもきはなくおほえつ、

我心ちにあくへきかきりなくならひ

〔源氏物語大成〕一一五七頁⑦～⑩



となる。若菜下巻、女楽を催した席で、源氏が夕霧に対して音楽について語る場面である。

本文一行目「まさりにたるをと」は河内本と一致し、定家本は「まさりにたるをやと」とする。臨模も短く、定家本と河内本が対立する箇所が一箇所のみであるため断定は難しいが、河内本系統と言ってよからう。

臨模した元の古筆切は管見に入っていない。また、道堅筆を伝称筆者とする『源氏物語』本文の断簡も管見に入っていない。断簡が見出されてから改めておこないたい。

なお、岩山道堅（生年未詳〜一五三二）は室町時代後期的人物。近江の佐々木氏の一族。道堅は法名で、諱は尚宗。將軍足利義尚に近臣として仕え、義尚の逝去により出家した。和歌を飛鳥井雅親（榮雅）に学び、三条西実隆との交友も深かった。『道堅詠草』『道堅自歌合』『道堅百首』などが残る。書は榮雅流に属する。

## 最後に

「古筆臨模聚成」所収の『源氏物語』本文の古筆切について

みてきた。元の断簡が現在管見に入らないものが多く、元の断簡と推測されるものがあっても図版が確認できていないため断定はしかねるが、臨模された断簡のツレとおぼしきものと比較検討してきた。

すでに北井氏<sup>7)</sup>により「原本を忠実に書写していない可能性は完全に否定できない」とは言われているものの、それぞれが新たなツレ（新出断簡）として、研究上の資料的価値を有していると考えられる。

## 注

- (1) 四辻秀紀「伝藤原公任筆『大色紙』の構成について―池田光政筆『古筆臨模聚成』の紹介をかねて―」（『金鯢叢書』第二十八輯、平成十三年十二月）
- (2) 北井佑実子「池田光政筆『古筆臨模聚成』における『貫之集』古筆切三種」（関西大学『国文学』第一〇三号、平成三十一年三月）
- (3) 注(2)論文で「書籍481-4」と記されているが、正しくは「書跡481-4」である。
- (4) 池田亀鑑編著『源氏物語大成』（中央公論社）
- (5) 小林強「源氏物語関係古筆切資料集成稿」（『本文研究

考証・情報・資料 第六集』和泉書院、平成十六年五月)

(6) 田中登編著『平成新修古筆資料集 第三集』(思文閣出版、平成十八年一月)による。

(7) 注(2)論文による。

【付記】

貴重な資料の調査をお許しくださった林原美術館に、御礼申し上げます。

(なかば よしこ／本学非常勤講師)